

チャンピオンスポーツを語る
—BSSCの競技力向上に向けた座談会—
的地 修¹⁾

The Championships in College Sports
—Discussion for Athletic Excellence at Biwako Seikei Sport College—
Osamu MATOJI

Abstract

For young athletes expected to become leaders in the new age, there is not doubt that sports consist of the unlimited possibility and attractiveness of enhancing human life. The mission of Biwako Seikei Sport College (BSSC) as the first educational institution majoring in sports is to educate students who are able to challenge any situations cleverly, spiritually, and physically through sports. To develop a body of knowledge regarding this important topic, a special discussion was held with coaches of BSSC sports clubs. This paper reports a summary of the discussion that was argued mainly on the following topics: “Be strong,” “To win,” and “what are champion sports?”

Key words : Morals, Discipline, Competition, Championships

1) 競技スポーツ学科

1. はじめに

新時代を担う若者にとって、スポーツは無限の可能性と魅力を秘めている。若者世代の中核を成す大学生、とくに本学のように全国で唯一スポーツを冠した大学の使命は、スポーツを媒体に知力に富み、精神的にも肉体的にもたくましく、あらゆる状況にも果敢に挑戦しうる人材をいかに育成していくかである。本学のスポーツクラブ活動（部活）の指導者は日本一やオリンピック、世界選手権を目指すトップアスリートの輩出といった競技本来の高い目標を掲げて現場に立っているが、同時に大学は人間教育の場であるという教育者の認識を教員同士が共有しながら学生と接している。開学7年を迎えた本学のスポーツクラブ活動をみると、指定種目にあげられる硬式野球、サッカー、陸上、水泳、男女バスケット、男女バレー、テニス、柔道を中心に着実な成果をあげている。テニス女子では、樋口由佳（競技スポーツ学科4年）が09年12月4日の日本学生室内選手権のシングルスで初の日本一に輝いた。テニス部監督で植田実教授（コーチングコース）の献身的な技術指導に加えて、若吉浩二教授（トレーニング健康コース）の低酸素トレーニングや佃文子准教授（健康トレーニングコース）のコンディショニングづくり、豊田則成教授（スポーツ情報戦略コース）によるメンタル強化のサポートなど競技スポーツ学科の教員連携と知恵の結集が本学から初めての日本チャンピオン誕生という大きな成果に結びついた。アスリートの資質を見抜き、マンツーマンに近い指導と多面的なサポートによる育成強化策は、他大学ではなかなか実践できない「びわスポ」固有のものであり、カレッジだからこそ実現可能なシステムともいえる。そこで本学の指定種目に関わるスポーツクラブ活動の指導者による座談会を開催し「強くなるには」「勝つためには」「チャンピオンスポーツとは」をメインテーマに討論したまとめを報告

する。

座談会の出席者は、以下に示す本学競技スポーツ学科教員で9部の監督、部長で、討論の具体的な項目も列記した。

出席者

渋谷俊浩（陸上）植田実（硬式テニス）
松田保（サッカー）若吉浩二（水球）
鳥羽賢二（バレーボール）村田正夫（柔道）高橋圭三（硬式野球）佐々木直基（バスケットボール）、白木孝尚（水泳）

討論項目

- ① 規律、モラルが大切
- ② チャンピオンゼミの創設
- ③ チームワークとは
- ④ びわスポの指導者像

2. 勝つために大切な規律とモラル

高橋：最近、強く思うのは規律がないと勝てないということだ。技術は持っているけど、選手にモラルが足りないからいろいろな意味で弱いし、そうした甘さが試合にも出て、勝てなくなっている。赴任した当初は違った。やんちゃななかにもモラルがあったから強かった。野球部だけの見方かもしれないが、うちの学生がみんな同じ質だとしたら他のスポーツでも勝てなくなってしまうのではないかと。

渋谷：規律やモラルに問題があるとすれば、その原因はどこにあるのか。陸上に限って言えば、中学の先生はせっかいいい選手を育てても高校に行ったらつぶされる、高校の先生は大学に行ってつぶされる、大学の先生は実業団に行ってつぶされるという不満の構図があって、どこが諸悪の根源なのか、その責任を押し付けられている。とくにマラソンや女子の長距離は昔ながらの師弟関係もあって早い段階で選手を囲ってしまうという閉鎖的な部分が規律やモラルの欠如に影響しているかもしれない。

松田：サッカーはオープンマインドで成功した。陸上のようなネガティブな世界ではない。オープンマインドはいち早く欧州のサッカー界が取り入れたが、指導者は人を育てないと指導者でないという考えがその根底にある。野球も閉鎖的に近いが、その中からはみ出して成功したが、イチローや野茂だろう。

鳥羽：スポーツの閉鎖的な一面は、大学の問題だけでなく、競技団体のガバナンスに問題がある。サッカーが成功している背景には、日本協会にはバレーやラグビー出身の理事がいて開かれた組織になっている。地域に根ざしたスポーツという面でも公共的なところで支持を受けている。バレーやバスケットは違う。組織は昔から閉鎖的だし、バレーはバレーだけ、バスケットはバスケットしか入れない。だから地域密着の欧州型を見習ったサッカーのようにうまくはいかない。では、大学ではどうしていくかを考えた場合、びわスポのようにこうしていろいろな競技の指導者がこういう場に集まってお互いの意見交換をすることは非常に意義深い。選手がいろいろな先生から学んだり、また他の競技の選手から違った刺激を受けたりすることはうちの大学の大きな特色になるかもしれない。

3. チャンピオンコースの創設

若吉：チャンピオンゼミを教員からの推薦と学生の同意を得てつくってはどうか。担任制の教育一環として、また、本学が優秀な人材を受け入れ、チャンピオンスポーツについてもどうやっていくのか、また、学生の夢をどう実現させてあげるのか。本学が明確な指針を示す時期に来ている気がする。

植田：チャンピオンゼミのようなものができれば、将来、大学院ができたときの予備軍になる。指導者、教員同士の横のつな

がりがあってファミリー的なうちの大学だからこそできる構想だ。

高橋：ゼミではなくてコースはどうか。プレーヤーに加えて、指導者コースもできるのではないか。チャンピオンコースでナショナルコーチを目指す人材を育成することも可能になる。

白木：コースで学ぶカリキュラムは6割か7割は同じだろう。選手を目指しているものも、また指導者を目指しているものも最終ゴールの違いはあっても根本的な考えは一緒だから対応できる。

若吉：開学7年目を迎えて本学もそろそろ「びわこオリジナル」を考える時期にきているのではないか。

鳥羽：カレッジの小さい組織なのだから仲良く、若さに満ちあふれ、機動力のある組織にしなくてはならない。しかし、そういう雰囲気はなかなか伝わってこない。どこに原因があるのか、わからないけれど、大事なことはやさしくないダメなのだと思う。優秀という言葉があるけど、優しさに秀でているということであり、そのやさしさから「和」が生まれ、強さも生まれる。他人を思いやり、へばっているなど思ったら助けてやろうという気持ちがチームプレーになり、チャンピオンスポーツにつながってくる。そうした優しさを発揮するには、やはり規律が必要になってくる。規律のなかで優しさを発揮できないと最後の最後で負けてしまう。バレーでいえば、第5セットの14-14であと2点取ったら勝ちという場面で阿吽（あうん）の呼吸で勝てるどうかは、普段いかに規律正しく互いに信頼感を持ってやっているかにかかってくる。学生生活すべてを含めてうちの大学には、やはり規律が必要なのではないか。うちの建学の理念にも入っているが、文武両道でありスポーツは全人教育そのものである。実業団にいたとき、プ

レーが急に伸びてうまくなる選手がいたが、そんなときは社会人としても成長していた。つまり社会性が出て、大人っぽくなっている。心技体ではないけど、どんなスポーツでも勝つには、能力、体力、精神力の三つのバランスがうまくとれていることが大事だ。

村田：柔道部で男子、女子をみているが、私は選手をオヤジの立場に立ってみるよう意識している。自分の娘だったら、息子だったら注意するだろうし、言うべきことも言うだろう。自分の子どもだったらこうあって欲しい、またこうなって欲しいという気持ちで接することが大事なのではないかな、と思っている。先入観でみているかもしれないけれど…

若吉：(指導は)教育の面も含めて難しい問題ではあるが、びわこを背負って戦ってくれる学生もいるわけだから、我々は全学的なコンセンサスで学生をサポートしなくてはいけない。びわこ成蹊スポーツ大学がこれからの100年、200年を輝いていくためには、どういった教育体制をとるのか、全学で考えていかななくてはならない大きな問題になってくる。スペシャルな学生をとってきた責任をすべてコーチングの先生が負うということは大きなプレッシャーになっている。

4. チームワークとは

鳥羽：学生を取り巻く環境の整備も必要ではないか。大学に来た当初、バレーの男子も女子も見えていたけど、学生たちにチームワークが大事だ、とやかましくいってもリアクションがなかなかない。なぜか、しばらくしてから気がついたが、彼らは朝食を抜いてくるし、お昼もカップラーメン。チームワークだ、がんばれといっても力が入らないというか、生理的に欲求が満たされていないのがんばれるはずがない。学生はみんな苦しいけ

ど、指導者はそうした環境面、家庭環境も含めてウォッチしていく必要もある。

植田：大学にはアドミッションポリシーがあるが、コーチングコースのなかでもう一度何を目指そう、あるいは向かっていく方向性を確認しあう必要があるのではないか。こういう大学にするのだという共通認識のもとで、社会力をつけた若者を送り出すことが使命だと思う。

若吉：そのアドミッションポリシーそのものが抽象的過ぎるのではないか。雲のなかにあるようでマトを得ていない。例えば、喫煙する学生をびわこは絶対受け入れないとか授業にプラスして全員にクラブ活動を義務付けるとか、アドミッションポリシーに加えてびわこルールを作ってはどうか。

白木：サッカー部にはアドミッションポリシーがあるのですか。

松田：4年でキッズリーダーの資格を取り、指導者としてC級ライセンスや審判のライセンスも取得する。トレーナーやマネージャーはそれぞれの分野で知識、経験を積んで卒業後は社会に出て即戦力になるような人材を育てる。それがサッカー部のアドミッションポリシーになっている。うちのような大学の使命、スポーツ学士という人材は卒業後に即戦力にならないければ意味がない。今の時代、うちの大学にきたらこういう人間に育てますよ、といった具合に我々が教育しなくてはならない。こういう学生を受け入れますのではなく、大学4年でいかに育てるかが問われるし、我々が自信を持ってこういう人材を育てますといわなくてはならない。

若吉：20世紀でなくて21世紀型の全人教育。100人や150人のような授業でなく、マンツーマンの教育も必要になってくる。

鳥羽：そうになると、インテリジェンス、体、モチベーションの三位一体のスポーツ人

が望まれる。頭でっかちでもだめ、身体能力だけが飛びぬけていてもだめ、かといって根性でいけ、というのがいいのかというものでもない。やはりバランスの取れた人材を育ててはいけない

植田：バランスも大事だが、むしろ型破りな人間を育てるのもいいのではないか。プレーは下手だが、モチベーションは飛びぬけている。いまはだめでも10年後にはびっくりするような活躍をしているかもしれない。人生なんてわからないもので、彼らがこの大学で得たものが10年後、20年後の人間形成に役立つことがスポーツ界にとってもいいことだと思う。そして、彼らが活躍することで初めてうちの大学が評価されることになる。そこまで長い目で見た育成を考えなくてはならないし、見極める目も必要になってくる。

5. びわスポの指導者像とは

渋谷：スカウトで獲得してきた選手は、我々が責任を持って最後まで育てていかなくてはならない。しかし、関東に優秀な人材が流れていく中で、我々はいかに自分の好みに合う選手を見つけ、育てるかが大きな課題になっている。勝つことを教えてやらなければならないし、また、本当の負けも教えなければならない。

村田：この大学にきてコーチングの面白さとか、自分の目標にしているのは、何もないこういう環境でどこまで自分がやれるかにあると思っている。イタリアのナショナルチームを指導してメダリストを育てたし、実業団の監督をやって優勝もさせてきた。そういう経験から振り返れば、この環境では限界がある。優勝するにはもちろん、いろいろな条件があると思うけど、ここでは、プロフェッショナルな競技の先生が集まっているからいろいろな意見を聞きながらやっていけ

る。初めて女子柔道の面倒を見ているけど、大学のブランド力だけで選手を集めて全国大会に出ている指導者もいる。そういうのを見ると、めちゃくちゃ腹が立つけど最近は「それぐらいアドバンテージをやらないと」と割り切るようになった。それがまた、ここでのコーチングの楽しさになってきている。

植田：コーチングにはこれという教科書がない。ここに集まっている仲間の指導者、教員のみんなから言葉を聞き、そこから自分が話す言葉が教えになっている。本学のコーチングコースというのは、そういう意味でいいつながりができている。

鳥羽：強くなるには、選手のエネルギーをいかに引き出してやるかだろう。清く正しく美しくというフェアプレーの精神も大事だけど、それだけではだめ。しんどくて、しんどくてもうこれ以上は動けないというときにあと一歩動けるやつが勝つので、そういう限界のときにどうやって動かしてやるか。限界を超える練習をやらせることも必要だ。それは根性論とは違う。

佐々木：バスケット部の学生からもっと戦術、技術とかを教えてほしい、とよくいわれる。しかし、それ以前に基礎体力がないのが大きな問題になっている。高校時代に鍛えられていないから大学で技術とか戦術を教えても上積みは期待できない。こっちも教えたいことはいっぱいあるけど、基礎体力がないのに教えれば、逆に崩れてしまう。関西ではしっかり走れれば、リーグ戦でもいい結果が期待できると思うのに、そういう状況を学生たちはなかなか気づかない。厳しいけれど、関西の1部リーグに上がる可能性は十分ある。

白木：私が大事にするコーチングは選手の欲をどこまで引き出せるか、だと思っている。選手は結局、かしこまっていた欲を

出さなくなっている。中学、高校まで抑えつけられてコーチングされてきたからだろう。もっとうまくなりたいたかといった競技に対する欲を表現できないでいる選手に対し、それを表に出させるアクションを起こさせてやる。欲と本気度がずれているからそれをうまくマッチングさせ、しかも継続させるようなコーチングを心がけたい。選手は一時、欲を見せるけれど長続きしない場合が多いからそれを常に引っ張り上げるような指導が大事だと思う。

村田：本学に入ってくる学生は、高校時代に勝ちの経験がなかったり、試合経験の乏しかったりのケースも多い。そういう選手たちはこちらのアクションに最初は飛びつくけど継続はしない。だから、こちらが管理して指導する必要があるのではないか。

白木：こちらが管理し始めると、それまでの経験のなさから指導者に頼ってしまい甘えてしまう。あくまでも選手の側が主体で向こうから来させて繰り返して継続させる。最終的には自立させることが目的だが、それができないといつまでたってもその選手は指導者に甘えたままになってしまう。私は選手が1回来たら次は自分からアクションを起こすようなことは絶対しない。

松田：40年近く指導しているが、私の場合は徹底的に言葉で、時には立ち直れないくらいやり込めてしまう。そこから這いあがってくる選手がブレイクする。これも

コーチングの一つ、私流の手法だと持っている。

渋谷：実業団の指導者から教育の現場にきて、教員という立場で教科書にあるような理想のコーチを追い求めたこともあったが、途中でやめた。理想を目指していると、学生も自分もしんどい。ほったらかしてはダメ、介入したりコミュニケーションをとったりしなくてはいけないとかといったようなことを一生懸命やろうとしたが、あるきっかけでそれは違うな、と思った。アプローチの仕方なのだが、自分の好きなように指導するのがよい、と考えを変えた。陸上の場合、厳しいけれどもいくらがんばっても、どんな科学的なトレーニングをやっても素質、資質がなければ、タイムや記録には限界がみえてしまうから、コーチングは余計に難しい。

鳥羽：最終的にコーチングとはなんだろうか、とよく考えることがあるが、突きつめれば、スポーツで何を養うかではないだろうか。それは生きる力であり、人間の力だということだと思う。つまり、砂漠に一人放り出されても生き残る力。そういう力を養うための指導がコーチングの原点だろう。

若吉：コーチングや情報戦略コースの教員、クラブ活動の指導者みんなが大学のチャンピオンシップを目指してがんばっているということをもっとアピールすべきだと思う。シンボジウムを開いて大学全体に広く知ってもらうことが必要だ。